

関宿の建築物

関宿には、およそ 400 棟の建物があり、その大半は江戸時代（1603-1867）後期から明治時代（1868-1912）にかけて建てられたものです。おおむね二階建てで、一階に付けられた木製の格子と二階の漆喰が塗られた土壁を特徴とする関宿の建物は、その多くが幅が狭く奥行きがある「うなぎの寝床（eel-nest）」と呼ばれる細長いつくりになっています。二階の空間は、昔から日常生活ではなく収納や養蚕のための屋根裏部屋として使われていました。

町を散策する際に注目したい関宿の建築物の特徴をいくつかご紹介します。

左右が対称の窓と非対称の窓

家屋の二階外壁の窓には、左右対称のものと非対称のものがあります。もし左右対称なら、その家は明治時代に建てられた可能性が高いでしょう。そうではなく、左右非対称であれば、それは江戸時代に建てられた家です。その理由は、江戸時代には窓の配置は風水によって決められていたからです。しかし、明治時代に西洋文化が入ってくると、風水は「非合理的」「東洋的」として信用されなくなり、窓の配置は厳密に論理的で均整のとれたものになりました。

虫籠窓（Insect cage windows）

二階の窓自体にも特徴があります。藁縄を巻いた木の棒を狭い間隔で縦に並べたものに漆喰が塗られたこの格子窓は、虫を飼うための目の細かい籠に似ていることから「虫籠窓」と呼ばれています。このような窓は、二階以上や屋根裏の壁のみにみられます。

ばったり（Banging benches）

いくつかの店先には、「ばったり」と呼ばれる折り畳み式の縁台/陳列台があります。ばたたりを下ろせば、商品を並べたり、人が座ったりできます。この名称は擬音語で、縁台が下ろされる時に立てる音に由来しています。

雨避けのカーテン

関宿の家屋の中には、店先に雨風が入らないように軒下に縦板をはめ込んでいる建物があります。「幕板（curtain board）」と呼ばれるこの板は、明治時代の中頃から使われるようになった比較的新しいもので、三重県のみで見られます。

繁栄で膨れる屋根

ごく少数の関宿の屋根は、微妙に凸状に膨らんだ「むくり屋根」と呼ばれるつくりになっています。このような屋根を葺くには高い費用が必要だったため、むくり屋根は大雨時の水はけをよくすると同時に、暗に裕福さを示すものでもありました。このことを裏付けるかのように、最も見事なむくり屋根が乗って

いるのは、大通りの中間あたりの北側に立つ、かつて両替商を営んでいた橋爪家の住宅だった家屋です。

塗る彫刻

関宿の家々でも特に注目したいのは、一階の軒上の両隅に描かれた漆喰彫刻です。意匠には、扇や龍、滝を登る鯉、さらにショッキングピンクの小草から顔を出す虎などがあります。

ストーリーを伝える瓦

通りに面した軒先の円瓦当も必見です。通りの北側にある桶屋の瓦には、木製の樽や桶や手桶を作るこの店の商いを示す「器」（vessel、container）という漢字があしらわれています。

看板の文字の謎

郵便局の真向かいには深川屋という古い菓子店があります。この店の建物と屋根看板はいずれも1784年に作られたものです。看板の両面に看板菓子「関の戸」の名前が書かれていますが、東側（京都方面へ西に向かう旅人から見た面）の「の」の文字はひらがなで、西側（江戸方面へ東に向かう旅人から見た面）の「の」は漢字で書かれています。その理由については諸説あります。京都は漢字より仮名の文化だったから平仮名が使われたのか。江戸の人は教育程度が低いから漢字が読めないと思われたのか。それとも、単に話題を提供して店に注目を集めるために書き分けたのか、など。

時系列に並ぶ建物

通りの北側には、関地蔵院に面して4つの建物が西から東に向かって時系列に並んでいる一区画があります：江戸時代のレストラン「會津屋」、レンガ造りの二階の外観と洋風の窓が特徴的な明治時代の「洋館屋」、（現在はドッグカフェになっている）大正時代の優雅な建物、そして昭和の酒屋。このような建物群は、建築時期的な多様性だけでなく、どの建物も築年数にかかわらず現在も使われているという点で、関宿らしいと言えます。